

# 禅の友

Zen no Tomo

2

February 2026





# ご本山だより 大本山永平寺

## 【涅槃会略諷經】



二月十五日は涅槃会ねはんえです。お釈迦さまのご命日であるこの日に先がけ、一日から十四日まで法堂はつどうに涅槃図ねはんずを掲げ、夕方の勤行の際に『仮垂般涅槃略説教諷經』かさつしはんねはんりくせつこうねいきょうをお唱えします。このお經はお釈迦さまが亡くなる直前にお弟子おとしさまたちに示された最後のお説法です。

体調を崩し衰弱していく中でお釈迦さまはお弟子おとしさまたちを集めました。そして、戒を守り、執着をせず、努力を怠らないようにしましようと、一つひとつのお教えを丁寧に説いてくださったのでした。

このお經のなかでお釈迦さまは「汝等おなじら比丘ひく」と何度も呼びかけます。あなたたち、弟子たちよ、よく覚えておきなさい。

と繰り返し呼びかけるのです。

この、あなたたち、弟子たちとは誰のことでしょう。

お釈迦さまのお弟子おとしさまたちは受け継いだ正しい教えをさらにその弟子おとしへと伝えました。

何代にもわたり伝えられたその教えを道元禪師どうげんぜんしさまが日本に伝えてくださいました。その教えに触れた私たちにとつてお釈迦さまは本師ほんし（根本の師匠）であり私たちはその末弟子まつしです。

つまり、あなたたち、弟子たちとは私自身や道元禪師どうげんぜんしさまの教えを大切にす仲間たちのことなのです。

このお經の最後にお釈迦さまはこのようにお示しになります。「汝等比丘、常にまさに一心に勤めて出道じゆこうを求むべし」。あなたたち、弟子たちよ、常に一心に修行に励み仏道を成就せんと求め続けなさい、と。このお言葉を今一度胸に刻み精進するのみです。

大本山永平寺  
福井県吉田郡  
0776-6313102



# ご本山だより 大本山總持寺

## 【節分会と涅槃会】



「世は皆無常なり、會うものは必ず離ることあり。憂惱を懷くこと勿れ、世相是の如し。」

仏遺教經

寒の入りより、連日鶴見の街に鈴（金剛鈴）の音を響かせ、読經しながら周つていた「寒行托鉢」が一月末で終わり、二月三日は一足早く春を呼び込む「節分会追難式」が行われます。

この日は人数制限いっぱいとなる約

二〇〇〇人近くの参詣者が福をいただきに大祖堂へ集まり、有名人や年男年女が豆をまきます。

なお、總持寺ではその年の干支の人に限らず、ご希望の方はどなたでも年男年女として豆まきに参加できます。

最初に石附禪師さまが御祈祷法要を勤められます。その後、禪師さまの「福はうち」の発声で一斉に豆がまかれ、たちまち堂内は賑やかな歓声と熱気に包まれます。

また二月一日から十四日まで「遺教にて晩課」が行じられます。大きな涅槃図を掲げてその前で、毎日午後にお釈迦さまの最後の説法を綴つたお經【仏垂般涅槃略説教經】が読經されます。

そして十五日はお釈迦さまのご命日である「釈尊涅槃会」が厳修されます。仏殿でお釈迦さまの入般涅槃を想い、禪師さまの御親修で法要が執り行われます。

この行持が終わりますと、二月中旬から三月下旬まで、新しい修行僧が道を求めて上山安居してくるのです。

大本山總持寺  
神奈川県横浜市

二〇四五—五八一一六〇二一

曹洞  
俳壇

選・坊城俊樹

秋思乗せ幾千万の波寄する

福岡県 獨本由美

評 「秋思」とは秋の寂しさに物を思うこと。その

思いが幾千万の波になつて寄せて来ることは。  
この寂しさは巨大である。もしかするとこれは  
戦争や天変地異による数千万の人たちの  
嘆きなのではなかろうか。秋思の句としてこ  
んな壮大なものに初めて出会つた。

今に生きここに生きるや去年今年

茨城県 鈴木米征

評 これもまた壮大な句。「去年今年」という  
季題は一本の棒のように流れる時間を感じさせ  
る。そしてこの句は今という時間、此処と  
いう空間に生きている自分の存在を表現して  
いる。まさにこの季題でしか表す事のできな  
い人生のやうなものを諷詠した。

サグラダファミリアみたいな銀杏枯れ 俊樹

選者吟

【作句小見】 これはまた大袈裟な句なのだが、今回の入賞の方の句にはこのくらいのものが必要かと。もつともこれは比喩の句なのであまり上等ではないが。かのガウディの建築を大銀杏に見立てた。かよう

コスモスに埋もれ思惟の辻地藏

島根県 藤江堯

敷きつめた落葉ゆたかに土眠る

福井県 廣瀬しのぶ

新酒よし古酒も亦よし古希祝ひ

東京都 鈴木英治

どの石の座り心地や秋の雲

千葉県 甲斐勇

女坂一段ごとに鉢の菊

千葉県 長澤きよみ

砂被る貝の口聞く冬日かな

島根県 金山陽

補助線のびたりと決まる夜食かな

宮崎県 石濱徹

境内に鐘突く響秋深し

茨城県 粕谷博章

一燭に托す一念十夜婆

岡山県 角脇隆子

ひじ枕転がる祖母に冬日の香

兵庫県 松井弘子

剣舞の子ら出番近づきゆくほどに厳しき  
眼つき顔つきとなる

青森県 菊池 さとよし

評 武士の精神性を表現したり、邪靈を払うために

祭などで舞う剣舞。剣をもって舞うものであれば、子らの表情にも必ず緊張感がはしるに違いない。その子らの表情を濃やかに捉えて臨場感のある一首である。

二期作と見粉ふほどに育ちたるひこば  
えの穂は揺れて光れり

三重県 藤川 幸子

選者詠

評 ひこばえとは収穫した後にまた生えて来る若芽

のこと。米不足の昨今の状況を思えば、また収穫が出来そではないかと思う作者の心理に頷く。光を当てた結句も効果的。

細胞と水の精という「ミヤクミヤク」はもつと  
生きたき人の笑顔よ

ちづ

作歌小見

徳本さんの一首では「鍵掛峠」の固有名詞の不思議さと紅葉の赤さが微妙な交感をしていて惹かれます。曾孫さんの遊ぶ姿に見惚れる深谷さんは百歳近い方だつたと思います。拙歌のミヤクは大阪関西万博のキャラクターのこと。

◆ 久方振りに訪い来し義妹階段に手摺り付きいる喜びを言う

静岡県 杉原 民子

◆ 山肌の荒れたる大山かすみにて鍵掛峠は紅葉燃え立つ

鳥取県 德本 義則

◆ 亡き母のまたおいでねのひと言で来客多き家に育ちさ

北海道 加藤 智子

◆ 木犀の香の不意打ちにあいにけり偶々通りし朝の路地裏に

埼玉県 白藤 巳玲

◆ 亡父植えし狭庭の鶴の実色づきて小鳥群がる種を飛ばして

静岡県 又平 幾世

◆ 秋深き釣瓶落としのタつ方ブレークリランプの花の賑わい

福井県 永田 弘子

◆ 霜浴びし黄菊の花をおひたしにせんとむしりて指のつめたし

岩手県 阿部 淑子

◆ ドア一枚のマンションに住み懐かしむ暮しの匂ひがあつた横町を

大阪府 柏原 才子

◆ たまさかに預かるひ孫おおはしや遊び仕草に吾は見とれる

愛知県 深谷 ハネ子

◆ 年賀はがき何枚要るや指おりて数えかぞえる千年生まれ

兵庫県 前田 あつ子